

# 「ぜんぶまかせる」

平成 28 年 3 月 27 日放送

富山教区 富山南組 妙行寺 奥野寛暢

以前、日本語の「前」と「後」の感覚がおもしろいという文章を目にしました。一般的に私たちは人生という道について、未来を「前」に見ながら歩いていて、「後」を振り返ると過去があるというイメージを持っています。ところが、日本語では、五年過去のことを「五年前」といいます。逆に五年未来のことは「五年後」といいます。要するに、過去なのに「前」といい、未来なのに「後」と表現しているのです。

私の考えですが、我々は、人生という道を足元の現在と「前」にある過去を見ながら、「後」にある何も見えない未来に向かって、後退りしながら進んでいると考えているからではないでしょうか。そう考えると、「前」が過去で、「後」が未来という表現は、誠に言い得て妙といえます。

思えば、戦争、災害、老後、病気、そして死。私たちの後ろには次に何が来るかわからない恐怖が満ち満ちています。未来へと後退りする次の一步は本当にあるのか？あっても何か踏みつけはしないかと考えると夜も眠れません。そのため、私たちはその見えない未来の安心を担保するために、学び、働き、色々なものを蓄えているのかもしれませんが、けれども、人生をかけてかき集め、蓄えた安心も、ずっと続くわけではありません。本当にまかせられるものを後ろに持たない人生は、満足いくものにはならないのです。

これを本願寺第八代御門主・蓮如上人は、「後生の一大事」という言葉を使われ、後ろの見えざる未来をまかせられる絶対の存在に出会うことこそ、人生のテーマだとおっしゃいました。そして、まかせることがどれだけ大切かを身をもって教えてくれたのが、祖父でした。

私の祖父は、戦前、戦中、戦後を生き抜いてきたいわゆる苦労人でした。しかし、苦労とは比べて初めてわかるもので、同時代のみんなが苦労人でしたから、それを自慢げに話すこともありませんでした。とはいうものの、七十歳の時に息子を亡くし、その心労からかすぐに喉頭ガンを発症し、声を失うということになりました。さらに、人生の最後に肝硬変を患い、骨と皮だけという風貌になってしまいました。

肝硬変で最後に入院したのは亡くなる二か月前です。ちょうど大学の春休みであった私は、ほとんどの時間を病室で一緒に過ごすことになりました。祖父は声が出ないので、ほとんどが筆談で会話をしていました。普段は強気な態度の祖父でしたが、二人だけになると決まって

「いつうちに帰れる？ うちに帰りたい」

と弱音めいたことを言い出します。家が恋しいのかと聞くと

「ちゃんとしてるか心配なだけだ」

と一転、お決まりの強気な態度です。仕方なく私も

「外出許可がおりたら帰れるらしいよ」

と適当にはぐらかしたのですが、祖父は、その後、数回にわたり外出許可がおりたと嘘をついて病院からの逃亡を謀りました。いずれも未遂に終わりましたが、そこまでして、何で帰りたいんだろうと、その時はただ疑問が私の中にわいたけでした。一時は回復に向かうのかと思われたのですが、どんどん衰弱していく一方となりました。

そんなある桜の咲いた日、本当に外出許可がおりました。今思えば、先が長くないので、身辺整理をしてこいという先生の配慮だったのでしょうか。家に帰ると、居間の真ん中に座り、懐かしそうにあたりを見回していました。一息ついたところで、本堂を指さしました。

「本堂にいきたいの？」

と聞くと、軽く頷きました。自坊は居間の二階が本堂になっていたの、祖父をおぶって二階へあがりました。御本尊・阿弥陀如来の正面に椅子を置き、そこに座らせました。

「短いお経でも上げようけ？」

と私が言うと、祖父は手で私を追い払うようなしぐさをしました。私はその様子を横に座って見ていたのですが、祖

父の視界にはもう阿弥陀さましかありませんでした。じっと見つめ続けていました。そのまま何分か経ったころ、おもむろに頭を垂れ、今度はそのままじっとして動きません。具合が悪くなったのかと思い、声をかけると、スッと顔を上げ、紙とペンを取り出して  
「もう満足です。」病院にもどろう  
と一言書きました。これだけでいいのかと何度聞いても、これでいいと頷くばかりです。私にしてみれば、あれほど家に帰りたがっていたのは、これだけなのかと釈然としないまま病院へもどっていきました。

数日後、春休みも終わり、大学のある兵庫へと向かう日、駅へ行くついでに病院に立ち寄りました。  
「これで、兵庫に行かなきゃいけないからね。早く元気にならってね。」  
という、祖父はホワイトボードとペンを寄越せと手で合図しました。わたしが寝ている顔の前にホワイトボードを持っていくと、なけなしの力をペンに込めて、やっとのこと一言書きました。  
これが、私に向けた祖父の最後の言葉となりました。その一言とは  
「ぜんぶまかせる」  
でした。意味が分からなかったので、看病を任せるという意味かと問うと、違うと首を横に振りました。お寺のことをぜんぶ任せるのかと問うと、再び違うと首を横に振りました。たまたま、  
「どういう意味け？」  
と聞くと、もういいと言わんばかりに手で追い払うしぐさをしました。私はそのまま病室を後にし、電車に乗りました。数日後、祖父が亡くなりました。その日以来、祖父の残した一言がずっと私の問いとなりました。

そして、仏教の勉強を本格的にするようになったある日、学校の先生が  
「南無阿弥陀仏の意味を知っていますか？」  
と聞かれました。少し間を置いて  
「阿弥陀仏に“ぜんぶまかせよ”という仏さまの呼びかけです。」  
と言われました。このとき、すべての疑問が解けたような気がしました。  
祖父が家に帰りたがったのは、自らの死と、阿弥陀さまの呼びかけに対して「本当に大丈夫なのか」という不安で、いてもたってもいられなかったからでしょう。  
そして、本堂の阿弥陀さまの前で  
「後ろにあると思っていた支えがすべてなくなりました。これでも大丈夫ですか？」  
と、その不安を吐き出すようにぶつけたのではないのでしょうか。その問いに対して、阿弥陀さまは  
「南無阿弥陀仏 ぜんぶまかせよ」  
と答えられたのではないかと思います。何度も聞いてきたその呼び声は、  
「どの人にも、生まれてこの方、後ろに絶対の支えなどないのは百も承知で、すべてを用意してある。だから、ぜんぶまかせよ」  
と聞こえたのではないのでしょうか。  
その時、後ろばかりでなく、今、このいのちの真ん前で、その力を施し続け、呼び続けておられたのが阿弥陀さまだったと、深々と頭を下げたのでしょう。「満足です」といった顔は、すべてをまかせきった念仏者のそれでありました。最後に書いた  
「ぜんぶまかせる」  
は、そんな祖父が阿弥陀さまとともに「後生の一大事」と向き合い、答えをいただいた慶びから出た一言だったと思えてならないのです。